

「災害への意識改革」

鹿児島県 鹿児島市立紫原中学校 2年 柴崎 芽生

夕食時、テレビのニュースを見ながら心配そうに突然、母が電話をかけ始めた。電話の相手は長崎に住んでいる私の祖父だ。

「お父さん、これからますます雨がひどく降るってよ。いざとなったら早め早めに避難しないとけんよ。」

七月六日、この日は台風七号から変わった温帯低気圧の影響で、梅雨前線が日本列島にかかったまま停滞しており、そのせいで同じ地域に大雨が降り続き、九州北部地方は大雨特別警報が発表されていた。警報はその後、中国地方や近畿地方でも発表され、西日本の広い範囲で降ったこの大雨は各地に甚大な被害を及ぼした。死者二百名を超える大災害となり「平成三十年七月豪雨」と命名された。

「大丈夫、大丈夫。これくらいの雨、たいしたことなか。七十年以上もこの町に住んでいる俺がいちばんわかっとるたい。いちいち大袈裟な。」

昭和の時代を生き抜いてきた職人氣質の祖父が、いかにも吐きそうなセリフである。長年培ってきた経験と勘だけを頼りに、自分だけを信じて、それを誇りとして、納得できるまでは安易に妥協するようなことはしない。なんとも一くせも二くせもあるような頑固な性格の持ち主である。こんな祖父に周りの意見に従うような柔軟な対応を求めることは簡単でないことは、私にもすぐ理解できた。そんな頑固一徹な祖父ではあるが、孫である私にだけは少しばかり甘いところも知っているので、いざとなったら優しく対応しようと出番を待ち構えていた。

幸い、祖父が住む長崎地方では大きな被害はなかったものの

「俺の勘は正しかった。結局、何もこなかった。」

と思っているであろう祖父の反応には、安心の気持ちと、その勘は次は通用しないよというなんとも複雑な気持ちが入り混じっていた。

今回の西日本豪雨災害で犠牲になられた方の七割が六十歳以上だったそうだ。「災害弱者」とされる高齢者が多かった実態が浮き彫りとなった。犠牲者の中には、一人で住んでいるお年寄りの方もいれば、要介護の方、痴呆の方など、避難したくてもできなかつた高齢者の方もたくさんいたであろう。しかし、祖父のように「自分だけは絶対に大丈夫。」という、避難できる身であるのかたくなに避難を断り、そのまま居座ろうとする姿勢を見せた被害者も多かったのではないかということだ。その根拠のない自信は一体どこから生まれてくるのだろうかと考え、長く生きてきた経験が邪魔をするのではないか、中途半端な知識が判断を誤らせるのではないかということだ。高齢になると、想像力や危機管理能力、判断力が鈍り、過去の経験に基づいての考えしか出来なくなるのかもしれない。まさか川の水が氾らんして道路まであふれ、住宅まで水が浸入するはずがないという誤った判断によって取り返しのつかない事態を招いた人もいたであろう。これまでの経験では語れない、想像もつかない事態が起こるのが自然の怖さでもある。自然現象を人間が止めることは不可能であるが、被害を最小限に抑えることは可能ではないかと思われる。

改めて防災について意識を高めようと鹿児島市が提供している「安心安全ガイドマップ」を手にしてみた。まずは身の回りの危険を知ること、すなわち鹿児島市で起こりうる災害を知ることが命の危険から身を守ることにつながるのだ。避難場所や避難経路を確認することも忘れてはならない。次に防災情報を入手すること。どのような状況に置かれても、確実に情報を取得できるようにしておくことは命を救うことにつながるのだ。また常日頃から家の中の安全対策、非常時持出品の準備などを心がけておくことも大切である。もし自分の身が危険な事態になったら、有無を言わずに直ちに避難することが当たり前になってほしい。周りの意見に従う柔軟性や協調性をもっと持って、祖父のような頑固な人には、孫世代の私たちが「一緒に避難しましょう。」とひと声かけたら素直に応じてもらえるのではないか。地域のコミュニティ力の良さを最大限に生かして、災害への意識を高め共有することは、被害を少なくすることに近づけられるのではないかと思う。

平成30年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「じいちゃんがもし犠牲になったら、残された家族の悲しみと後悔は、計り知れんよ。」と電話で伝えると、

「100まで生きるけん大丈夫。」

という、なんともたくましい返事が返ってきた。